

思い出すことなど

三井 知行 (大阪新美術館建設準備室学芸員)

國府理さんとの最初の出会いは、我慢比べのようでした。

私が群馬のハラ ミュージアム アークに勤めていた頃、仕事を“5時半ダッシュ”で上がり、車を飛ばして、前橋のもと消防署を利用したギャラリーへ。この時個展を開いていたのが國府理さんで、私が彼について知り、同時に実作品を観た最初でした。遠隔地なので、個展といっても初日でなければ作家はいないかな、と思っていましたが、運良く國府さん本人にもお会いすることができました。

かなり広めの会場だったので多くの作品が展示されていたはずなのに、不思議と印象に残っているのは《1t台車》と小さな車が冷蔵庫になっている作品。國府さんは、その車に乗るように勧めてくれ、実際に私が乗りこむ時に(今よりは多少軽いが)90kgくらいある私の体重で車が揺れるのを見て笑っていました。

その後彼も隣に乗り込んできて、長い時間いろんな話をしました。作品の説明に始まり、野村仁さんのソーラーカープロジェクトのこと、他の関西のアーティストの動向、果ては群馬の車社会がどれだけすごいのか、などなど。話題が私の出身地に及んで、高校まで青森県にいたことを伝えた際に、「だからこれくらいの温度はぜんぜん平気」と付け加えたら、彼曰く「あっ、しまった」…。私が寒さに堪えられなくなって車から逃げ出すのを待っていたというのです。

少し残念そうな顔をしながら車を降りる彼を追って私も降り、もう一回作品を観てから会場を後にしたのが國府さんとのファーストコンタクト、私の快勝(?)でした。

一見他愛のないこの出来事のようにありますが、群馬の小都市にいと、関西の作家については美術雑誌などで情報が先に入ってくるのが普通で、実作品を見て(本人にも会って)初めてその作家を知るとは結構珍しいという事情もあり、このエピソードのおかげもあって、國府理さんは私にとってちょっと特別な作家となりました。

最近改めて略歴を調べてみると、この個展は2001年に開催されているようです。そうするとその後2年ほどの間に私が大阪に移り、アートスペース虹での個展で彼と再会していることになりま。この時、私は既に前橋の個展を1990年代中頃か末のことと思い込んでいたらしく、「ずいぶん前に1度あっただけなのに、覚えていてくれてありがとう」と言う。「そんな、忘れていませんよ」

というような返しだったのを覚えています。私はそれを上記「我慢くらべ」の一件があったから、と理解していましたが、今にして思えば「言うほど昔のことじゃないから覚えている」という意味だったようです。

その後は年に数回、彼自身の個展や、他の展覧会・アートイベントで顔を合わせ、お話をするくらいのお付き合いで、ついにお仕事で一緒させていただく機会のないまま、10年ほどが過ぎました。私が國府さんとお会いしたのは、2014年2月、テヅカヤマギャラリーのタムラサトル展のクロージングが最後になってしまいました。この日は午後4時からタムラさんと國府さんの対談もあったのですが、平日の午後では聴くことも叶わず、その後のレセプションに顔を出して少しだけお話することができました。

私は、彼の出品する展覧会を極力観に行くようにはしていたので、ある意味傍観者的な立場で、作品が少しずつ深化し、作家がキャリアを重ねていくのに立ち会ってきたのかもしれない。特に2010年代に入ってから美術館などでの個展の機会も増え、いよいよ作家として「第2ステージ」に入ったな、と思っていた矢先の事故、本当に悔やまれてなりません。

國府さんの作品や作家活動の評価や論評、すなわち「國府論」のようなものは、私よりずっと適任の方がたくさんおられるので、その方々が論じてくださるでしょう。私が彼の作品について何か一つ言うとしたら、それはどんな深刻なテーマを扱った作品でも、作品から上質なユーモアが失われることはなかった、ということに尽きると思います。ユーモアというとお笑いや不真面目なものと捉えられ、作品を高く評価する際には「単なるユーモアにとどまらない」というような、美術の価値の中でも一段低いもののように扱われたりします。しかし、本当のユーモアは人間存在の根源から湧き出てくるエッセンスのようなもので、真剣で深刻な作品の中にユーモアがあるというのは、とても大切なことだと、私は思うのです。